

2012年末にカバヤ食品株式会社の岡山本社にて、商品開発部研究室室長の岡本^{さとし}智志様が大村専務理事が「ジューC グルコース」開発秘話を伺いに行ってきました。以下にインタビューから得られた岡本様の熱い思いをご紹介します。



岡本室長とカバヤ食品本社にて

■製品開発のきっかけ

「ジューC グルコース」の開発はとある1本の電話がきっかけでした。たまたま私がとったその電話は、「カバヤ食品さんで、安くておいしい補食をつくれませんか？」という1型糖尿病患者のご家族からのお願いの電話でした。そのお話の中で「糖尿病患者は、血糖値をコントロールするためにブドウ糖を摂取している」ということなども聞きました。もともと私は清涼菓子「ジューC」の開発担当者であり、以前はブドウ糖がメインだったジューCの配合を、味の改良のためにブドウ糖と砂糖を半々に変更した張本人でもありました。そのときから「ジューCにはブドウ糖がどのくらい入っていますか？」という問い合わせがあり、何でそんなことを聞くのだろう？と疑問に思っていました。このときの電話で1型糖尿病について知り、ようやくその疑問が解決しました。そして、ジューCに含まれるブドウ糖の量を減らしてしまったことに何か後ろめたさも感じつつ、「何かできることはないだろうか」と、電話をくださった方が所属する患者会に足を運び、お話を聞くことからスタートしました。患者会の皆さんとお会いして1型糖尿病について詳しく知り、病気を患う子どもたちの日常を聞くにつれ「私たちの会社は子ども達が支えてくれている。その子ども達のために何かしたい！」という思いが強まり、商品開発の大きな原動力となりました。きっかけとなった1本の電話を私がとっていなかったら、ジューC グルコースは世に出ていなかったかもしれませんね。

■製品開発で苦労された点

電話を受けた当時は、ジューCの担当ではない企画二課に所属しており、すぐに商品化というわけにはいきませんでした。そこで、まずは研究室のメンバーに試作品づくりを依頼し、それを患者会の皆さんに試してもらうことから始めました。何度かの改善・改良により反応も概ね好感触になってきたところで、将来の商品化をスムーズに行おうと思って工場試作をし、それを使って大々的にアンケートをお願いしたりしました。サマーキャンプなどでも使ってもらったりして、より現場の声を聞くこともできました。そして、いよいよ工場試作でつくった在庫が残りわずかになり、今後の提供をどうしようかと悩んでいるとき、なんとタイミング良く清涼菓子担当になったのです。新商品開発のためにトップ（幹部）向けにプレゼンをする機会があるのですが、その際に1型糖尿病患者さん向けのこういう商品もつくりたいとの思いを伝えました。正直、利益も見込めない商品なのでいい返事は期待していませんでしたが、「やったらいいんじゃないのか」との返事をもらいました。正直、とても驚きましたが、チャンスがめぐってきた！とすぐに商品化に向けて急ピッチで取り掛かりました。(笑)



■この製品にかける思い

学校での利用を想定し、お菓子を食べていると思われまいよう、パッケージは商品名の『ジューC』よりも原材料名の「グルコース」という文字を強調したデザインに、中身（味・香り）はほんのりレモン味に仕上げ、香りを抑えているけれどもおいしく食べられるよう工夫しました。本当は容器なども変えたいという思いもありましたが、そこはコストの問題を解決するためにジューCと同じものにしていきます。

1型糖尿病患者・家族の皆さんに会うようになり、患者さんはインスリン注射を打っているだけで、コントロールさえできれば普通の人と何ら変わらないことを感じています。そのため、病気だから薬的なものをどうにかこうとかという考え方自体がおかしいのだとも思うようになりました。製薬メーカーさんだと、病気だから薬をという感覚で製作されていた可能性があるところを、食品メーカーとして味付けなどにもこだわられたのは良かったと思っています。

■全国の患者・家族へのメッセージ

最近、皆さんが喜んでくれているということがいろんな場面で伝わってきます。それは本当に私にとって1番嬉しいことです。皆さんの役に立てていると実感できることが、やって良かった！頑張って良かった！という思いにつながります。今後、もっともっと必要とされている人のところに届いて、多くの方が喜んでくれるといいなと思います。また最近、そういった活動にいろんな方がご協力くださっていることも本当に嬉しいです。

岡本様は、「今はもう賞味期限は切れているんですけどね（笑）」と、完成が本当に嬉しくて、商品化した最初の「ジューC グルコース」1本と掲載された新聞記事を今でも机の引き出しにしまっているという話をしてくださりました。完成までには目に見えないところでたくさんの苦労や試練があったと思うのですが、それだけの思い入れを持って製作して頂いたことを患者の1人として本当に嬉しく思いますし、感謝です。今は1人でも多くの患者さんの手に渡り、低血糖対策はもちろん、学校や職場での補食を摂ることへの不安が少しでも和らぐことを期待しています。

このように私たちは一人ではありません。応援してくださるたくさんの方がいます。同じ1型糖尿病を持ちながら様々な境遇で頑張っている仲間もたくさんいます。是非一人で悩まずに、皆で助け合い、励ましあいながら、一步一步進んでいきましょう。ゴールに「根治」があることを信じて、患者自身が声を大にして、家族をはじめとしたサポーターに支えられながら、皆で力を合わせて実り多き2013年にしていきたいと思います。

専務理事 大村詠一